

韓国/異文化体験交流ツアー（2025 年度夏期）

当たり前が覆る韓国異文化体験で私の世界観を変えた 4 日間

商経学部 佐藤憲太

自分がK-POPアイドルをきっかけで韓国を大好きになり授業を取りそして、ようやく行けた韓国4日間。韓国に滞在している期間は、単なる旅行ではなく、自己を見つめ直す機会となりました。食、流行、ファッションそして人のエネルギーなど見るものすべてが新鮮で、これまで私が「常識」としていた多くのことが覆されました。この体験から、いかに世界が多様であるかを学びました。

最初に感じたものは日本語の流暢さです。渡航前に、私は日本語が通じないことや自分が勉強した韓国語が通じるか不安で、翻訳アプリを準備していました。しかしソウル・クアンジュ・釜山で出会う人や話しかけてくれる人の多くが日本語を理解し、英語か日本語を流暢に話すことに驚かされました。例えばお土産屋さんや街中で迷った時も、尋ねた人は日本語で丁寧に案内してくれました。この体験は、隣国に対する私の認識の甘さを浮き彫りにしました。彼らにとって日本は身近な存在であり、積極的に言語や文化を学んでいるという事実気づき、私自身の異文化学習と韓国語を本気で勉強しようという意識に変わりました。

それと同時に、韓国のお店では、日本と比べ物にならないほどの強い精神サービスと「押し」を感じました。私が商品を取ると店員さんは次々と「韓国でしか買えませんよ!」「これ今しかないのよ!」「若者みんな持っているよ!」と、とても熱心におすすめを教えてくださいました。最初は戸惑いましたが、これは単なる押し売りではなく、お客様への「熱意のあるコミュニケーション」なのだ理解できるようになると、その活気ある交流自体を楽しむことができました。

また今回の体験で特に美意識を刺激されたのが、色鮮やかで優美な韓服でした。1日目に訪れた景福宮では、多くの方がレンタルした韓服を着用して写真撮影を楽しんでいる姿を目にしました。その華やかさとデザインの可愛らしさは、日本の着物とはまた異なる魅力があり、韓国文化に対するあこがれを強くしました。

そして韓国といえば食文化です。食において複数の当たり前が覆されました。まず、食卓に並ぶスプーンと箸の役割が厳格に分かれているということです。日本ではどちらを使っても構いませんが、韓国ではご飯とスープはスプーンで、おかずは箸で食べるというルールがあることに驚きました。この細かい作法は、日常の食事にも文化の規範が強くされている証拠だと思います。

また、食事にキムチが欠かせない事にも気づきました。どの店に入っても、メニューや価格帯に関わらず、必ずキムチが提供されます。それは韓国の食卓における「必須アイテム」であり、食事を構成する上で不可欠な要素だと感じました。キムチ自体はおいしく日本より酸っぱい印象を受けました。正直なところ味の繊細さやバランスにおいては、日本の食事が恋しくなる瞬間もありました。

最後に4日間の体験の中で最も衝撃だったのが、トイレットペーパーをトイレに流していけないという瞬間です。使用済みの紙を流さずに、備え付のごみ箱に捨てるという行為は、日本の衛生観念や生活習慣に慣れている私にとって、かなりの抵抗と驚きをもたらしました。これは、古い配管設備の規格や、紙を流すと詰まるという歴史的な背景があるためと知りましたが、毎日行う習慣が国によってここまで違うという事実は「清潔感」や「インフラ」に関する私の世界観が、日本という国の特殊な環境に依存していたことを痛烈に教えてくれました。

この4日間の韓国異文化体験は、単なる観光の記憶ではなく、私の「世界の解像度を」を上げる貴重な学びとなりました。言語の壁の低さ、伝統に対する意識、食卓での細かい作法、そしてインフラに基づく生活習慣の違い。これら一つ一つが、私の持つ「当たり前」の枠を壊し、世界は多様な「当たり前」で成り立っていることを教えてくれました。この経験は、今後グローバルな社会で生きていくうえで、他者の文化や価値観を尊重し、理解しようとする姿勢を持つことの重要性を強く認識させてくれました。